

1. 神奈川県の間東大震災被害

1923(大正12)年9月1日11時58分、神奈川県西部を震源とするマグニチュード7.9の地震による激しい揺れが南関東を襲い、建物倒壊や土砂災害、津波、大規模な延焼火災、液状化等が発生し、我が国の自然災害史上最悪の100,000名を超える方々が犠牲となった関東大震災を引き起こしました。

中でも、震源直上に位置する神奈川県は、ほぼ全域が現在の震度6強から7に相当する揺れに襲われ、横浜や横須賀などの都市部、丹沢や箱根などの中山間部、相模湾沿岸部、相模川や酒匂川沿いの農村部等あらゆる地域が壊滅的被害を受けました。

地震による住家被害棟数は、全潰¹(焼失含む)が東京府(当時)の約25,000棟を大きく上回る約64,000棟、半潰(焼失含む)が約54,000棟、津波による流失や土砂災害による埋没等も含め、約125,000棟が被害を受けました²。

死者・行方不明者数は約33,000名に上り、揺れによる住家全潰の死者数は被災府県全体の約半数を本県が占めるほか、火災による被害も大きく、津波、土砂災害による被害の大半が本県において発生しています³。

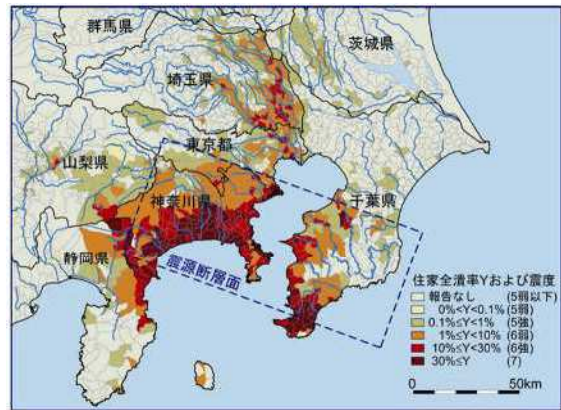


表1-1 神奈川県の住家被害棟数²及び死者数³

住家被害棟数	全潰 (うち非焼失)	半潰 (うち非焼失)	焼失	流失 埋没	合計
神奈川県	63,577 (46,621)	54,035 (43,047)	35,412	497	125,577
横浜市	15,537 (5,332)	12,542 (4,380)	25,324	0	35,036
横須賀市	7,227 (3,740)	2,514 (1,301)	4,700	0	9,741
死者数(行方不明者含む)	住家全潰	火災	流失埋没	工場等の被害	合計
神奈川県	5,795	25,201	836	1,006	32,838
横浜市	1,977	24,646	0	0	26,623
横須賀市	495	170	0	0	665

¹ 諸井孝文・武村雅之, 日本建築学会構造系論文集 第540号, 「1923年関東地震に対する東京市での被害データの相互比較と地震動強さ」, 2001年には、「現在「全潰」は「全壊」と表記されるのが一般的であるが、関東地震当時の木造住家の被害モードは「壊れる」というより「潰れる」状態であったと考えられるため、本稿では過去の資料に多く用いられている「全潰・半潰」の用語で表わす。」とあり、本資料でもこれを適用する。

² 諸井孝文・武村雅之, 「関東地震(1923年9月1日)による木造住家被害データの整理と震度分布の推定」, 日本地震工学会論文集, 2(3), 2002年

³ 諸井孝文・武村雅之, 「関東地震(1923年9月1日)による被害要因別死者数の推定」, 日本地震工学会論文集, 4(4), 2004年

東京都(当時の東京府)では、東京両国の被服廠跡で 38,000 名もの死者を出したように、建物・人的被害の多くの要因を火災が占めますが、神奈川県では、揺れによる建物倒壊による被害が県内全域で広く発生しています。横浜や横須賀などの都市部では、大規模な延焼火災が発生したほか、工場等の被害により多数の死者が発生した事例があります。丹沢や箱根などの山地や丘陵地、台地の縁辺部では地すべり、土石流などによる土砂災害が多数発生し、多くの犠牲者が出ています。また、海沿いの崖上に位置する根府川駅では、崖崩れと地すべりにより、ホームや駅舎、それに到着しかけていた列車ごと相模湾に転落し、駅自体が消滅しています。相模湾沿岸部では6~7mの津波⁴が押し寄せ、家屋流出や人的被害が発生しているほか、地盤の隆起による港湾被害も発生しています。相模川や酒匂川沿いの農村部では揺れや液状化により農地や河川堤防、橋梁の被害も発生しています。

このように、神奈川県内では、地震が引き起こすあらゆる災害が各地で発生しました。まさに「関東大震災は、神奈川県直下で起きた神奈川の地震」と捉え、過去の震災被害を正しく認識し、そこから得られる教訓を次世代につないでいく必要があります。



図 1-2 震災で焼失した当時の県庁舎とその周辺 (神奈川県震災誌より)

⁴ 羽鳥徳太郎・相田勇・梶浦欣二郎, 「南関東周辺における地震津波」, 東京大学地震研究所編「関東大地震 50 周年論文集」, 1973 年 を参考にした「1923 関東大震災報告書」2006 年を引用